いざ、新たなライフステージへ

音楽をしている中で、自分もあこがれの人と出会うことがある。僕だったら、いきなり話しかけても大丈夫だろうかとまず躊躇する。しかし宮路はそんなことは考えない。渡部のサックスに衝撃を受けた宮路は、渡部に積極的に接していく。一緒に音楽をしようという熱い思いを、渡部に次々とアピールしていく。

そんな宮路は、緊張や遠慮のない勇気のかたまりだ。自分の考えと真っ直ぐに向き合う姿がかっこいい。目標に向かって突き進む宮路の行動力が、どう表現したらいいのかわからないくらい僕に響いた。宮路の本気モード、するとと決めたら徹底的に進んでいく力、前向きな気持ちを、僕は自分の中に取り入れたいと思った。

一方、渡部は宮路に何を言われても、穏やかなまなざしで、一定の感情で接している。それはそよかぜ荘の利用者さんに対しても同じだ。何を言われても感情が揺らがない。僕

20 × 20

だったら些細なことでも焦ったり、イライラしたりしてしまう。渡部はどうやって感情のコントロールをしているのだろう。誰に対しても冷静で、穏やかなその感情を僕にも分けてほしい。

夢を追い求める宮路と違い、渡部は介護士の仕事をし、全てのことをこなしている。苦手な分野はあるのだろうか。宮路が無職でも、見下したり、急に態度を変えたりしない。僕は渡部のことを人として尊敬する。だから僕は、人を引きつける渡部の演奏と人間性も自分の中に取り入れたいと思った。

宮路は確かに親から経済的に自立するという点ではマイペースに過ごしていて、後悔しているような部分がある。それは一つの失敗かもしれない。しかし、今、宮路はそよかぜ荘で渡部や水木さんや内田さんや本庄さんと出会い、心を決めて、就職活動を始めるところからしっかりやりなおそうとしている。やはり、したいことを見つけるためには、いろいろなと

ころに行って、たくさんの出会いを経験し、自分に刺激を与えることが大切だと改めて感じた。なぜなら、僕も自分の進む道について大きな刺激となる経験をしたからだ。

僕はこの夏、東京で2泊3日の「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」のインターンシップに参加し、アテンドになった。アテンドは、視覚障がい者が晴眼者に見えない世界を案内する。僕はアテンドをして、晴眼者は日常に視力がないと生活ができないということを知った。同時に、全盲の僕たちが伝えられることを実体験した。プログラムの中の講演を聴いて、「今の世の中は社会に障がいがある。障がい者が自分を活かした活動ができる環境がないだけだ。」ということも知った。そのとき僕は考えた。じゃあ、自分がこの社会を変えていこう。僕にもこの社会を変えていくことができるのではないかと。この夏の体験を通して、僕は進路を考えるための視野が広がった。

宮路の人生を大きく動かすことになったもう一つの刺激がそよかぜ荘のおじいさんやおばあさんとの出会いだと思う。宮路は最初、水木さんや内田さんに買い物を頼まれることを嫌がっていたが、関わっていくうちに、どんどん心を開いていった。厳しいことを言いながらも、まるで孫にいろいろなことを教えていくような接し方に、僕は愛のある優しいまなざしを感じた。そのつながりから、宮路の中の本当の優しいハートが引き出されていくことに気づき、僕は心がすっきりした。そして、本庄さんにウクレレを教えて、楽しそうにしている宮路は、人に好かれる心の持ち主だと思った。

宮路と渡部がそよかぜ荘でセッションをしたあと、宮路は入院した水木さんからの手紙を渡部から受け取った。それから間もなく、水木さんは亡くなった。宮路の悲しみは深い。

このシーンを読んで、僕もとても悲しくなった。高齢者の福祉施設で働いていると、当た

り前のように死と向き合っていくのだと知った。死はもちろん悲しいけれど、僕たちにも絶対に死は訪れる。

だからこそ今を精一杯生きようと決心し、覚悟を決めて働く必要があるのだと感じた。

将来、福祉施設で働きたいと考えていた僕は、夢ばかり描いていたことを自覚した。亡くなるという大変な現実と向き合う仕事であることを知った。死を意識するということは、自分が今したいことを考えて、悔いのない人生を送ることだと思った。

渡部がそよかぜ荘でサックスを演奏するように、ぼくも聴いていて心地よくて、体も心も楽にする音楽を、ヴァイオリンやピアノで演奏したい。そよかぜ荘での出会いによって宮路が新たな人生を拓くための扉をたたいたように、僕もたくさんの出会いを通して、新たな人生の扉をたたきたい。そして将来に向けてもっと真剣に考え、それを実現できるように僕はこれから歩んでいきたい。